

新聞やテレビで活躍した流通ジャーナリスト、金子哲雄さんは2012年10月、41歳で亡くなりました。「病気を隠して仕事を続けたい」と在宅での終末医療を選んだ哲雄さんの望みをかなえようと、妻の稚子さん(47)は、最後まで夫のそばで支え続けました。

### 結婚10年目

11年6月のことです。役員を務めていた広告制作会社での仕事中、夫が電話してきて、「いきなり「末期の肺がんだった」と言いました。頭を殴られたようなショックで、思わず立ち上がって「うそー」と叫んでしまいました。

2人は、編集者だった稚子さんに哲雄さんが「本を出版したい」と相談したことがきっかけで知り合い、結婚。その後、哲雄さんは消費者の目線に立った流通ジャーナリストとして、マスコミで引っぱりだこになった。忙しいなかで激しいせきに悩まされ、胸部検査を受けた。結婚して10年目を迎えていた。

検査入院の結果、悪性の腫瘍が肺をむしばむ「肺カルチノイド」と診断されました。肝臓や骨などにも転移していました。数千万人に1人という珍しい腫瘍で、医師に「今すぐ亡くなくても驚かないほどの末期」と言われました。私は「仕事を休んで治療に専念してほしい」と思いました。ただ、夫は、子どもの頃

## ケアハート

### ● 金子稚子 さんの



「繊細な人だったので、知らない人が大勢いる病院よりも、自宅で終末医療を受ける方がストレスが少なかったと思います」(東京都内) — 清水敏明撮影

# 夫が望む通りの日々

## 「仕事続ける」一心に支え

から思い描いていた「お買得情報を伝える」という仕事に軌道に乗ってきたところで、夫は「病気を隠して仕事をするのだから」と私に宣言しました。

になりまして。別の病院で放射線治療も受け始め、夫は生き続けたらいいなと喜びましたが、肺の手術で一時入院するなど、体調は次第に悪化していきました。

日の入浴はとも大切な時間でした。酸素濃縮器のチューブをつけたままキャスター付きのいすに座り、私が浴室まで押していきました。最初は自分で髪を洗っていましたが、下を向くと息が苦しくなるため、次第に「髪を

### 尊厳の 一線

家で稚子さんと過ごすのが好きだった金子さん。最後まで自宅で自分らしい生活を送ろうと、在宅医療の体制が整っているクリニックの医師の診察を受け、12年7月半ばから在宅医療が始まりました。

夫は朝晩シャワーを浴びるほど清潔好きだったので、毎

1967年、静岡県生まれ。出版勤務、静岡県生まれ。出版社や広告制作会社勤務。編集者だった2002年、金子哲雄さんと結婚。哲雄さんの死後、介護やとを考えたこと、夫を看取(小学館)を500日(小学館)出版した。

洗って」と頼まれるようになりまして。入浴だけで疲れるのですが、「気持ちいいなあ」と喜んでいたので、この楽しみを奪うことは考えられませんでした。

### 社会に問う

12年10月1日。金子さんは主婦向け雑誌の電話インタビューに答えた後で寝込んだ。深夜に呼吸のリズムがゆっくりに変わり、止まった。いつも診察に来ていた医師が往診し、翌2日、死亡を確認した。

終末期、夫は在宅終末医療や死の迎え方についての原稿を書き、死後に「僕の死に方エンディングガイド」シリーズ001(小学館)として出版されました。私も、夫の命の今日2日に「LTN」という会社を作り、夫をみつめた体験を基に、在宅終末医療や死について社会に考えてもらう活動を始めました。

夫が深夜に目を覚まし、「おれの人生は無駄だった」と話し始めたこともあり、学校で勉強したり就職して身につけたりしたことは、全て「生きるため」のもので、「死ぬため」のものは何もありません。「今までやってきたことが全く通じない」という無力感と、体験したことのない

石垣島でサイクリングを楽しむ稚子さん(右)と哲雄さん(2008年撮影、稚子さん提供)

